R62 地下鉄電車（写真提供：川崎重工業株式会社）

ニューヨークの地下鉄に日本の技・心遣いあり

きらびやかな摩天楼が建ち並ぶマンハッタンと、ブルックリンなどイーストリバーを挟んだ近隣地区を結び、ニューヨーク市の地下の大動脈となっているのがメトロ（地下鉄）です。1904 年の開業以来、幾度となく延長されてきた線路は全長 662 マイル（約 1065km。営業キロ（注）は約 374km）に及びます。その上を日々 6000 超の車両が甲高い金属音を立てながら 24 時間忙しく往来しています。開業当初 5 セントだった初乗り運賃は 1948 年まで据え置かれた後、合計 17 回もの値上げを経て現在は 2.75 ドルになりました。ただ、どこまで乗っても同一運賃というのは今も昔も変わりません。

多様なバックグラウンドを背負った人々が行き交う国際都市の発展を見守ってきたメトロでしたが、1970 ～ 80 年代は不景気から街の治安が著しく悪化し、駅構内や車内でも犯罪がまかり通ってしまう危険な公共交通機関となっていました。その後メトロの治安は大きく改善しましたが、それには日本の技が貢献してきたことをご存じでしょうか。

宇田川氏デザインの R143 地下鉄電車の車内

当時、メトロ関係者を悩ませていた問題の一つが、車両のあちこちにあふれていたグラフィティと呼ばれる派手な落書きであり、いろいろな犯罪を助長するものと考えられていました。そこに登場したのが川崎重工業株式会社の車両「R62」です。車体の内外がステンレスで覆われていることから、落書きの除去を容易に行えるようになりました。また、空間デザインの力で犯罪抑止に貢献したとされるのが、日本人工業デザイナー・宇田川信学（まさみち）氏です。同氏がデザインした車両に足を踏み入れると、車内が白昼のように明るく、広々と感じられる等の工夫が施されています。もしこうした日本の技がなかったならば、メトロは違う道を歩んでいたのかもしれません。

今日も眠らぬ街ニューヨークでは、利用者の安全を願う気持ちの込められた車両が、喜怒哀楽をそれぞれに抱えた何百万人もの人生を運んでいます。

（日本銀行ニューヨーク事務所）

注：営業キロとは営業区間の距離をキロメートル単位で示したもの。

＊本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。